宗教を基軸とした地域のつながりとへき地教育の取組みをめぐって

―佐世保市黒島を事例に―

須賀　忠芳

Ⅰ．はじめに

高度成長期以降，地方から都市への人口流入が進む中で，人口規模や富の偏重など，都市と地方の地域格差が問題視されるようになった。1962 年の「全国総合開発計画」（全総）において，「地域間の均衡ある発展」がうたわれて以来，1987 年の「第四次全国総合開発計画　（四全総）」に至るまで，新幹線，高速道路等のネットワークの整備，国土利用の偏在是正と過密過疎，地域格差の解消（「新全国総合開発計画　（新全総）」（1969 年）），地方振興と過密過疎問題への対処，全国土の利用の均衡，人間居住の総合的環境の形成（「第三次全国総合開発計画　（三全総）」（1977 年））などの施策が取られ，都市と地方の地域格差の解消に比重が置かれてきた。「21 世紀の国土のグランドデザイン」（1998 年）では，多自然居住地域（小都市，農山漁村，中山間地 域等）の創造など，「多様な主体の参加と地域連携による国土づくり」が掲げられている。しかし，その施策の結果は，交通体系の整備に伴って小都市が大都市経済圏に取り込まれて求心力のある大都市圏に集約されていくストロー効果にみられるように，むしろ，都市への一極集中は加速することとなった。

全国的な人口減少が進行する中で，都市に人口が集中することは，疲弊した地方の状況をさらに深刻化するものとなっていった。とりわけ，本稿において掲出する佐世保市黒島のような離島をめぐっては，その総人口は，1955 年の 130 万人から，2010 年の 63 万人と，この 50 年間でほぼ半減し，高齢化率も，離島を除いた全国の数値が，1995 年の 15%から 2010 年の 23%と推移したのに対して，離島では，同年比で，24%から 31%に高まり，離島の高齢化率は，「全国（離島以外）の傾向を 15 年ほど先行する形で年々高まってきている」ことが指摘されている（三木，2015）。加えて，多くの離島の主産業となっている農林水産業のうち，特に水産業では，その生産額が，1990 年の 2800 億円から，2010 年には 1200 億円まで低落し，この 20 年間で半分以下となっている。また，その交通コストでも，本土と離島の間で，輸送距離 50km での単価比較では，新幹線の運賃と離島フェリー航路の旅客運賃がほぼ同額であり，高速船は新幹線よりはるかに高額な交通手

段となっていて，その生活基盤の弱体化が問題視されている（三木，2015）。

一般に，山間地や離島にみられる交通不便な土地を指す「へき地」（僻地，以後「　」なしで表記する）の現況は，人口流出や，主産業としての農林水産業の不振，交通インフラの未整備など，その地理的条件や社会状況から，今日では，生活拠点を営む場として多くの人々の関心を誘うものとはなりえていない。その一方で，伝統的な生活様式を維持するへき地には，祭礼や郷土芸能などの多様な文化資源が残存するとともに，その構成主体としての濃密なコミュニティが保持されていて，多様な地域観，価値観を構成する要素は，都市部よりもむしろ豊富であると言えるであろう。教育の面でも，玉井康之は，2000 年代初めに，その自然条件や社会状況などの「へき地教育の特性」を生かすことの効用を言い，「現代の子どもの生活環境からすれば，都市のマイナス環境の側面が大きくなり，その結果へき地教育の積極的な可能性が存在している」とし，「へき地の環境は，都会に比して物質的な側面での落差があったとしても，逆にそれを教育的条件として生かしていく可能性を有している」とも述べている（玉井，2002，p.5）。

玉井の論をふまえれば，へき地の環境は，近年，社会生活を営む上で注目されているソーシャルキャピタルを多く含み込んだ環境である可能性がある。

ソーシャルキャピタル（社会関係資本）について，稲葉陽二は，「人々が他人に対して抱く『信頼』，それに『情けは人の為ならず』『お互い様』『持ちつ持たれつ』といった言葉に代表される『互酬性の規範』，人や組織の間の『ネットワーク（絆）』」であるとし，「これらの社会関係資本によって，集団としての協調性や，『ご近所の底力』といった，市場では評価しにくい価値が生み出される」と述べている（稲葉，2011，p.1）。また，他の定義では，「あまり面識のない人同士の間にも，共通の目標に向けて協調行動を促すことにより，社会の効率を高め，成長や開発，持続にとって有用に働く社会関係上の資源のこと」（『imidas 2018』）ともされている。内閣府によるソーシャルキャピタルに関する委託研究では，ソーシャルキャピタルについて，次のように述べられている（内閣府，2003）。

> 「信頼」「規範」「ネットワーク」といった社会組織の特徴であり，共通の目的に向かって協調行動を導くものとされる。いわば，信頼に裏打ちされた社会的な繋がりあるいは豊かな人間関係と捉えることができよう。（調査の趣旨）

それらの定義に基づきながら，本稿では，ソーシャルキャピタルについて，「共通の目的に向かって協調行動を導く社会関係上の資源」と定義することとする。内閣府の委託研究によれば，共同体的な人間関係が維持され，ソーシャル・キャピタルが豊かな地域ほど，失業率や犯罪率が低く，また出生率は高いとする調査結果が示されている（内閣府，2003，p.61）。「無縁社会」[1] が言われ，人々の結び付きが薄れていく中で，多くの社会不安，社会問題を抱える現代の日本の社会において，ソーシャルキャピタルについて，改めて注目

する必要があるだろう。「無縁社会」の状況が危惧される日本の社会状況において，「信頼に裏打ちされた社会的な繋がりあるいは豊かな人間関係」が保持されていることと思われるへき地の環境は，ソーシャルキャピタルを蓄積してきた環境にあると類推することができ，それは，地域の学校教育にも影響を与えている可能性がある。ソーシャルキャピタルを醸成，強化してきた場所として，へき地の環境とその教育について，その様相を分析することには大いに価値があると言える。

また，ソーシャルキャピタルを形作る要素として，宗教に着目する研究がある。大谷栄一は，稲葉陽二の「(独自の社会的文脈をもつ集団やそれらの集団からなる地域社会としての) コミュニティこそソーシャルキャピタルの苗床を形成している」とする言 (稲葉, 2008, p.76）を引きながら，「現代日本の地域社会における寺院，神社，教会などの宗教施設を，『ソーシャルキャピタルの苗床』として捉えることが可能」であるとし，混迷する日本社会において，宗教が形作るソーシャルキャピタルのあり方について，その可能性を模索する問題提起をしている（大谷，2012，p.32)。

これらの点をふまえて，本稿では，次の三つの研究課題を設定する。第一に，地域における宗教のつながりが，ソーシャルキャピタル醸成にどのように影響しているのか，という点である。第二に，ソーシャルキャピタルとも関連したへき地の環境が，地域の学校教育にどのように影響しているのか，という点である。第三に，地域における宗教のつながりとへき地の環境が，学校教育，地域教育にどのように影響を与えているのか，という点である。事例として取り上げる黒島は，島内人口の約８割がカトリックを信仰する地域である。島内の黒島小学校，黒島中学校は，児童・生徒数の減少もふまえて，2018 年度から，併設型小中一貫教育校として，黒島小中学校が開設され，黒島小中学校では，「ふるさと黒島学」に代表される特徴的な教育実践にも取り組んでいる。

本稿は，上記三つの研究課題をふまえながら，佐世保市黒島を事例に，宗教を通じたソーシャルキャピタルの醸成，強化と，ソーシャルキャピタルとも関連したへき地の環境に着目し，宗教を基軸とした地域のつながりを明らかにするとともに，それが支えるへき地教育の取組みについて明示することを目的とする。上記の研究目的を達成するために，次の方法で研究を進めていきたい。まず，調査対象地域と調査対象校の概況について論述する（第 2 章)。次に，調査対象地域の歴史的経過とその特性について論述する（第 3 章)，最後に，調査対象校での特徴的な教育活動を概括し，その考察を通して，全体を総括し，本研究の意義について論述することとする（第 4 章，第 5 章)。

Ⅱ．調査対象地域と調査対象校の概況

１．調査対象地域の概況

調査対象地域である佐世保市黒島について，概括する。

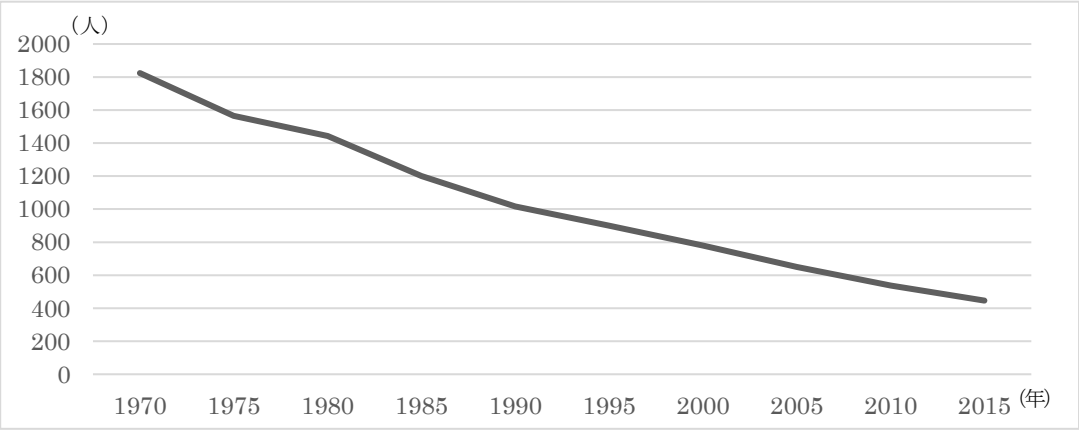
調査対象地域の黒島は，北松浦半島の南西沖合に浮かぶ島々が連なる九十九島の中で最

大の島であり，面積 5.37 ㎢，周囲 12.5 ㎞からなっている。黒島は，長崎県佐世保市に属し，佐世保市相浦港から西へ約 12km の場所に位置する。相浦港と黒島の間では，一日 3 往復の「フェリーくろしま」が運行されており，高島を経由した所要時間は 50 分である。黒島は，人口の約 8 割がカトリック信徒であることが特徴的な島であり，島の中央には，国指定重要文化財ともなっている黒島天主堂が存在する。

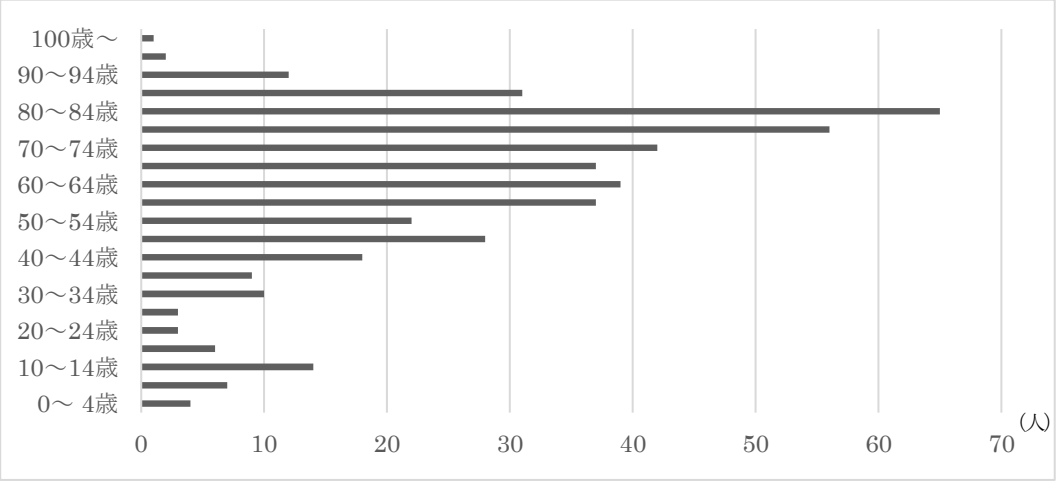
黒島の主な産業は漁業で，沿岸での一本釣り，刺し網漁が中心であり，従事者は島全体の 70%を占めている。農業は，自家用を中心に，麦・甘藷・トウモロコシを主とし，一部出荷される野菜・馬鈴薯等の栽培がみられる。特産品である黒島みかげ石は藩政時代から有名で，蕨地区を中心に採掘され，多くの業者も従事していたが，現在は，1 業者のみで，主に墓石を中心に加工している。

主産業の漁業，海産資源の利用では，1979 年に養殖場が整備され，2010 年からマグロの養殖が始まり，2016 年には，完全養殖マグロの生産体制が取られている。一方で，漁業は，聞き取りによれば，漁獲量の減少や燃料費の高騰もあり，漁に出る機会も限られてきていると言い，漁師の中には，子どもに跡を継ぐようには言わない者も多いという。主産業としての漁業の不振から，高校を卒業した後，島に戻ってくる者は，ほとんどいないという。実際，黒島の人口減少は急激に進んでいる。

黒島の人口は，1960 年代初めには，2000 人台であったが，1970 年には 1824 名で，その後，1995 年に 1000 名を切り，2015 年には 500 名を切って 446 名となっている（第 1 図）。2015 年の年齢別人口は，総数 446 名中，80 歳から 84 歳が 65 名で最も多い。0 歳から 14 歳が 25 名，15 歳から 64 歳が 175 名，65 歳以上が 246 名で，65 歳以上が 55%



第 1 図　佐世保市黒島町の人口推移（1970 年～2015 年）
（佐世保市統計資料をもとに筆者作成）



第２図　佐世保市黒島町年齢別推計人口（2015 年）
（佐世保市統計ポータルサイト「町別年齢別推計人口（平成 27 年度）」より筆者作成）

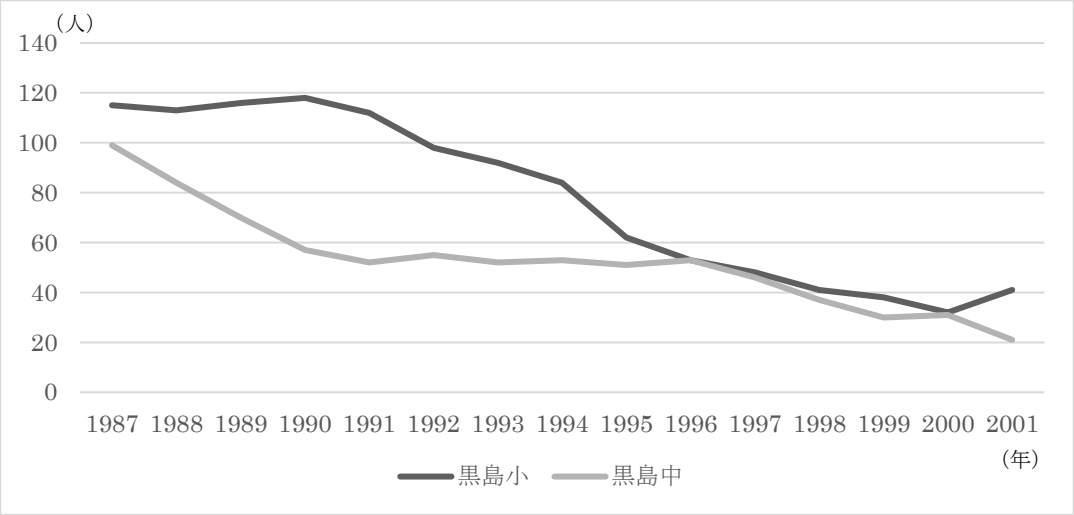
を占めている（第２図）。また，最新の統計として 2020 年５月１日時点の総人口は 390 名である（佐世保市統計ポータルサイト「町別推計人口（令和２年度）」）。

２．調査対象校の概況

調査対象校である佐世保市立黒島小中学校について，概括する。

黒島小学校は 1875 年，黒島中学校は 1947 年に創立されている。先述した通り，黒島の人口は，1960 年代初めには，2000 人台であったが，その後，減り続け，2020 年５月時点で，400 名を切っている。黒島小学校は，1970 年代始めまでは 300 人台の児童数があったがその後減り続け，1980 年代終わりから 90 年代始めまでは 100 人台を維持していたものの，その後，急激に児童数を減らしている（第３図）。また，黒島中学校は，1970 年代終わりまで，150 名程度の生徒数を維持していたが，1980 年代終わりからは 100 名を切り，さらに 1990 年代終わりには 50 名を切って，2000 年代始めには 20 名程度になっている（第３図）。

児童・生徒数が減少していく中で，小中一貫教育校の設置が検討され，2012 年，佐世保市教育委員会は，黒島小学校，黒島中学校を併設型小中一貫教育校とすることを決定した。決定の経緯について，2013 年 12 月の佐世保市議会市定例会文教厚生委員会で，教育次長（学校教育課長）は，「生徒数が少なくなってきており，地域の方からの要望等があった。それに伴い，私たちの方も地域に出向き，地域の方，あるいはＰＴＡ，育友会の会長，保護者の方等々含めて計３回説明会等を開き，その中で，通学審議委員会の中ででもお話をしていただき，決定したという経緯がある」と説明している（佐世保市平成 25 年 12 月定例会文教厚生委員会）。2014 年度からは，黒島小・中学校は小中併設校として



第３図　黒島小学校，黒島中学校の児童・生徒数の変遷（1987 年～2001 年）
（佐世保市統計資料をもとに筆者作成）

運営され，その後，黒島中学校の敷地に新校舎が建設され，2018 年度から，併設型小中一貫教育校として，黒島小中学校が開設された。調査時の 2019 年度の在籍児童生徒数，学級数は，小中学校あわせて 16 名[2]，5 学級であった。

1954 年制定の「へき地教育振興法」を施行するために，1959 年に文部省令として「へき地教育振興法施行規則」が発令されている。同規則では，基準点数と付加点数の基準を設け，その合計で，へき地 5 級からへき地 1 級までの 5 段階が設定され，1962 年には準へき地が加わって 6 段階が設定されている。時代状況にあわせて，当該基準は改訂され，直近の基準改訂は 2017 年 4 月に施行されている。へき地等級について，黒島小中学校は，3 級と指定されている（全国へき地教育連盟サイト）。

Ⅲ．調査対象地域の歴史的経過とその特性

１．黒島の開発と潜伏キリシタンの歴史

黒島の歴史には，その開発に，江戸期のキリスト教禁令下において，キリスト教の信仰を維持し続けた，いわゆる「潜伏キリシタン」（「隠れキリシタン」，以後「　」なしで表記する）[3]が多く移り住んだことが関わっている。本節では，黒島の開発と潜伏キリシタンの歴史について概括する（第 1 表参照）。江戸時代の黒島は，平戸藩に属し，石高は少ないものの，農業・漁業に加えて，御影石の採石地，及び藩の軍馬の放牧地として知られていたという[4]。その後，1803 年に，平戸藩の牧場が廃止され，平戸藩が開拓民の誘致政策を進めたため，それに応じて外海地域など各地から，潜伏キリシタンが黒島に移住してきた。

彼らは，以前から営まれていた仏教徒の集落であった本村（ほんむら），古里（ふるさと）から離れて，村外れの荒れ地を耕して住みついたとされ，その結果，日数（ひかず），根谷（ねや），名切（なきり），田代（たしろ），蕨（わらべ），東堂平（とうどうびら）の6集落は潜伏キリシタンの集落として形成された。入植の様子について，「新しい入植者は，従来からの（当地の領主）西家譜代の子孫が耕作する場所とは競合しない地区，出身地ごとに集落を作った」とされ，その土地は，開放された牧地や山林であったことから，自作地としての耕作が可能であり，そのことが，「隠れキリシタンの信仰保持を容易にした」と解釈されている（佐世保市教育委員会，2011，p.83，文中追記分は引用者による）。自作農としての耕作地の確保，及び，密かに信仰を維持できることが，周辺地域から当地への潜伏キリシタン移住につながったものと思われる。

多くの住人が潜伏キリシタンでありながら，当地では，浦上や五島のような，キリシタンに対する苛酷な弾圧が行われたことは無かったとされている。島内住人の多くを占めた潜伏キリシタンと，本村地区を中心とした仏教徒との関係は，どのようなものであったのだろうか。当時，黒島に移住した潜伏キリシタンは，表向きは，本村地区の興禅寺檀家となって仏教徒として振る舞い，毎年，本村集落の平戸藩の役所では「絵踏み」が行われ，潜伏キリシタンはキリストまたは聖母マリアの像を踏むことを余儀なくされた。一方で，密かに，興禅寺の本尊の袖の下には，マリア観音像が隠して祀られていて，寺院に参拝することを装いながら実際にはマリア観音に祈りをささげていたとも言われている。また，戒名について，興禅寺の墓地では4字戒名であるのに対して，潜伏キリシタンが葬られた墓地ではその多くは 2 字戒名であるという。それについて，「本村等の古くからの檀家に対して新参者だから差別した」とする見解もあるが，「寺側は隠れキリシタンと知って2字戒名にした」とする推測もなされている（佐世保市教育委員会，2011，p.91）。マリア観音像の密かな配置や，戒名の相違といった事柄からは，当地において，潜伏キリシタンの存在が公然の秘密ともされ，藩当局も黙認し，仏教徒側もそれを容認していた可能性がある。離島の厳しい生活環境において，それを協同してしのぐことが求められていたことは勘案する必要はあるものの，信仰をめぐる厳しい「分断」がある当時の時代状況にあって，当地は，それを乗り越えた，仏教徒とキリシタンとの間の「協調」がなされていた稀有な地域であったことを看取することができる。

幕末に至り，禁教下にも関わらず，1864 年に長崎大浦に天主堂が建立されると，1865 年 3 月 17 日，着任したプティジャン神父に，浦上の潜伏キリシタン達が信仰の告白をする，いわゆる「信徒発見」があり，その後，五島，外海など長崎県の各地から信徒が訪れることになった。黒島も，信徒を代表して，出口吉太夫，大吉父子ら 20 名が，同年 5 月に大浦天主堂の宣教師らと接触し，自分たちの信仰を表明し，黒島に約 100 家族，600 名のキリシタンが潜伏している状況が報告された [5]。その後，宣教師が変装して長崎から巡回して黒島を訪れて，1872 年，出口宅で，初めてミサが執り行われた。また，伝道師とし

第１表　キリスト教に関わる黒島，及び国内，長崎の出来事（16 世紀後半～20 世紀初め）

年代	黒島	国内，長崎
1587 年		豊臣秀吉, バテレン追放令を発する
1596 年		二十六聖人殉教事件
1613 年		江戸幕府, 全国に禁教令を発する
1637 年		島原・天草一揆
17 世紀後半	平戸藩，牧場（黒島牧）設置	
18 世紀前半	最初の入植（壱岐，中津良（平戸）から 2 戸）	
1785 年	106 戸の移住（大村藩，佐賀藩から。平戸藩主導か。大半が「潜伏キリシタン」）	
1797 年	大村藩と五島藩の間に，百姓移住の協定成立。大村藩外海地方の農民，五島または黒島に移住	
1803 年	平戸藩，黒島牧撤廃 以後，開拓民誘致，7 集落形成 （古里集落を除く 6 集落が潜伏キリシタン集落）	
1854 年		日米和親条約締結，開国へ
1864 年		大浦天主堂建設
1865 年	5 月，出口吉太夫，大吉父子ら 20 名，信仰告白，黒島の約 100 家族，600 名の信仰を報告	3 月，浦上の潜伏キリシタンの信仰告白（「信徒発見」）
1872 年	出口宅で，初めてミサ実施。黒島のカトリック，名実ともに復活（出口家跡地は「信仰復活の地」として顕彰）	
1873 年		禁教の高札撤廃
1878 年	ペル一神父，平戸・紐差に赴任。巡回地として黒島にたびたび来訪。木造の初代黒島教会堂建設（1880 年完成）	
1897 年	マルマン神父，赴任	
1902 年	初代教会堂建替え，煉瓦造の教会堂建設	

（長崎巡礼協議会(2010)，佐世保市教育委員会(2011)，世界文化遺産「長崎と天草地方の潜伏とキリシタン関連遺産」サイト「黒島の集落」をもとに筆者作成）

て出口大吉らが養成され，明治初年には島内のほとんどの信徒が教会に復帰したとされる。

1878 年には，ペルー神父が平戸・紐差に赴任し，その巡回地として黒島にたびたび来訪した。そこで，島の中央に位置する名切地区での本格的な教会堂建設が起案され，1880 年に，木造の初代黒島教会堂が完成した。また，1897 年にマルマン神父が赴任すると，新たな聖堂建設を目指す意欲が示され，1902 年，初代教会堂が建替えられ，現在につながる煉瓦造の教会堂が建設された。敷地の石垣や建物の礎石には黒島産の御影石が用いられ，約 40 万個の煉瓦は，当初は島内で生産されたものの，品質が安定せず，大半は他地区から購入している。建築資材は名切ノ浜で陸揚げされ，そこから信徒たちが運び上げた。教会堂の建築にあたっては，経費総額は 15,363 円 60 銭で，信徒たちは労働奉仕のほか，男 15 歳から 60 歳まで 1 人につき 1 日 60 銭の負担（寄付）をしたとされ，またそれ以外の多くの資金はマルマン神父が調達したとされている。黒島天主堂について，「その規模や内装の完成度などわが国屈指の教会建築」とされ，「黒島のような小さな島においてこれほど立派な天主堂を建て得たことは，それ自体が奇跡」，「その奇跡を成し遂げてしまうほど，信徒たちの信仰の復活と自由に対する喜びは大きなもの」であり，「黒島天主堂はまさに黒島におけるカトリック復活を象徴する建物」として評されている（佐世保市教育委員会，2011，p.49）。その後，村役場や小学校も，教会のある名切地区に設置されている。島民の 8 割以上をカトリックが占める中で，カトリックが当地の主要な担い手として認識されていったことがうかがえる。

こうして推移してきた，黒島における潜伏キリシタンの歴史とカトリックの信仰は，「顕著な普遍的価値」として，「禁教政策下において形成された潜伏キリシタンの信仰の継続に関わる独特の伝統の証拠」「長期にわたる禁教政策の下で育まれたこの独特の伝統の始まり・形成・変容・終焉の在り方を示す」ものとして，2018 年 7 月に世界文化遺産に登録された「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」の 12 の構成資産の一つ，「黒島の集落」として選定され，大いに注目を集めるに至っている。

２．黒島の日常におけるキリスト教との関わり

潜伏キリシタン時代のカトリックの習俗は，近代に入って「信仰復活」を果たしたのち，社会の近代化とあわせて，変化していったのだろうか。それについて，明治・大正時代の思想家，地理学者の志賀重昂が 1900 年代初めに黒島を訪れたという記録がある（1911 年 6 月 5 日付，同年 6 月 6 日付『読売新聞』）。志賀は，その体験を『世界山水図説』（1911 年）にも書き留めている。その中で，志賀は，黒島について「人口二千五百，内二千二百は天主教徒である」として島民のほとんどがキリスト教徒であることを挙げ，また「島の歴史，史料，此島へ移住せし年代等に就き何等の事をも語らず，村長初め何事も判り兼ます々々々々々一点張りになし居る」とし，島民が島の歴史等，何ら語らなかったことを言い，それについて「此等の教徒は惨刑を免るゝ為め，多年秘密を守ることが第二の天性と

なりたるもの」として理解している（志賀，1911，p. 229，なお原文の旧字は書き改めた。引用分，以下同じ）。また，島民のキリスト教徒としての旧来からの習俗として神棚仏壇が置かれていないこと，（神への供物として）1歳以下の子牛を屠ること，子どもに至るまでいつも襦袢を身につけて肌を露出していないこと，男女ともに「アニマの名」（洗礼名）を持っていること[6]，「今日は何曜か」の意で「今日は何タか」と言うことがポルトガル語の曜日[7]を表現する語尾に由来することを挙げて，「隠れキリシタン」の場であることが推察できるとし「当年の切支丹が其儘保存せられて居るのは，全く大なる古物館を縦覧する感がある」「此の黒島の如き奇異なる個所もあるなり」（志賀，1911，p.230）と述べている。志賀の記述からは，禁教令が解かれて約 40 年が経過しても依然として「大なる古物館」「奇異なる個所」とも記述された潜伏キリシタン時代の習俗が残存していたことがうかがえる。

黒島は，その後も，島の住民の多くがカトリック信徒であり，多くの住民がカトリックの信仰を土台とした生活習慣を保持し続けている。2010 年の統計では，270 世帯人口 538 のうち，仏教徒 127 人に対してカトリック信徒は 411 人を占めていて，島内住民の 8 割弱がカトリック信徒である（佐世保市教育委員会，2011，p.95）。前述した，江戸期に地区ごとに色分けされた宗教受容に変化はなく，島内の 8 集落のうち，仏教徒の本村，古里地区を除く日数，根谷，名切，田代，蕨，東堂平の 6 集落は，住民のほとんどがカトリック信徒である。江戸期から現代に至るまで，集落ごとの宗教的住み分けが明確であることに加えて「それぞれ固有の社会生活を営んでいること」も改めて注目されている（佐世保市教育委員会，2011，p.95）。

一方で，半農半漁の生活で，ある程度の自給自足で成り立っていたその生活は，高度経済成長期以降，その生活様式に変化が求められたほか，教育水準の向上もあいまって島外に流出する者が多くなった。同時に，長子相続を原則とした仏教徒に対して，末子相続を原則としたカトリックの家には「『家を相続する』という考え方から，『家を継がなくていい』という価値観への移行」が起こったともされている（佐世保市教育委員会, 2011, p.97）。その相違は，仏教徒の多い，近隣の高島との比較で明らかであり，高島は，「長子相続の形態をとり現在でも『長子が家を相続する』という考え方が支配的で，島に残ることが当然」とされていて急激な人口減少は見られないという（佐世保市教育委員会，2011，p.97）。事実，黒島と高島でその人口を比較すれば，2000 年から 2020 年までの推移で，高島が，減少率で平均 10.9%，2020 年人口は 2000 年人口の 6 割強を維持しているのに対して，黒島は，減少率で平均 15.9%，2020 年人口は，2000 年人口のおよそ半分となっている（第 2 表）。加えて，世帯数の推移も 2010 年からの 10 年間で，高島は大きな変化はないものの，黒島は約 80 戸の減少がみられる（第 3 表）。前章でも触れた通り，黒島では島内人口の急激な減少が起こっているが，それは主産業である漁業の不振に加えて，前述の通り相続をめぐる島内カトリック信徒の意識が影響している可能性もある。

第２表　黒島と高島の人口，及びその減少率
（2000 年以降，５年ごと）

(年)	黒島		高島	
	人口（人）	減少率	人口（人）	減少率
2000	779	―	261	―
2005	650	16.6%	239	8.4%
2010	520	20.0%	205	14.2%
2015	438	15.8%	182	11.2%
2020	390	11.0%	164	9.9%

第３表　黒島と高島の世帯数（戸）
（2010 年以降，５年ごと）

	2010 年	2015 年	2020 年
黒島	290	238	216
高島	62	62	61

（第２表，第３表とも，佐世保市統計ポータルサイトより筆者作成　2000 年，2005 年は当該年 10 月１日，それ以外は当該年５月１日の数値）

その一方で，潜伏キリシタン以来の伝統を有する黒島のカトリック信徒は，現代においても，強い意志でその信仰を保持していることがうかがえ，その生活は，「基本的に『信仰を守ること』が優先」されているという（佐世保市教育委員会，2011，p.100）。カトリック信徒の住民は，「『先祖たちは信仰のためにこの島を選び，信仰を守るために奥へ，奥へ，不便なところへと入っていった。』と語り伝え」る中で（佐世保市教育委員会，2011，p.100），教会に対しても信徒全体で協力して，それを維持していく様子が見受けられる。カトリック信徒の地域住民からの聞き取りによれば，毎週土曜日午後６時，日曜日午前７時からのミサでは，準備，あと片づけは地区ごとで担当し①根谷・蕨，②日数・東堂平，③田代，④名切の４グループで１か月ごとに交替で担当し，それは主に地区の女性（婦人会）が担当している。月に１回，第２日曜日には大掃除が行われ，それには男性が参加している。年に 3～4 回は教会周辺や地区の草刈りなどの作業も行われているが，教会関係の仕事は苦にならないとのことであった。全国各地で地区挙げての清掃活動などが実施されている地域も多いが，不参加者に対して「出不足金」を徴収するなど，なかば強制ともされる作業に対する不満が近年では多くなっている [8]。その一方で，黒島では，住民の多くが，カトリックという信仰を紐帯として，地区全体及び地域全体における強い結びつきを保持して，他の地域にはない，頻繁な共同作業にみなが率先して従事していることがうかがえる。

ところで，地域づくり協力隊として活躍している方からの聞き取りで，黒島での勤務を決めた理由として，「島民にオープンな方が多く，その印象が良かった」といった事柄を挙げていた。島を訪れる観光者からも，悪い評判は聞いたことがなく，親切に応対してくれた，開放的でおおらかに迎えてくれた，といった島民との関わりを印象深く挙げる者が多いという。日常から離れた開放感の中で，島外の者が離島に好印象を抱くということは，離島ではよく聞かれることではあるが，黒島の好評ぶりは特に顕著なものがある。際立って伝えられる，黒島での島外の者からの好ましい印象は，何に起因するものであろうか。

黒島では，子どもの教育についても，特徴的な話を聞き取ることができた。相浦港と黒島を結ぶフェリーは，高島を経由して往来していることから，乗船している子どもは，観光者などを除けば，黒島か，高島の子どもになるが，二つの島の子どもは，明らかに乗船時の態度が異なると言い，騒ぎ立てることの多い高島の子どもに対して，黒島の子どもは，反対に公共のマナーを守っておとなしく，行儀よく乗っていることが多いというのである。この話は，きわめて主観的な印象であり，また話者は，黒島小中学校の教員であったことから，身びいきであることなども勘案して捉える必要はあるが，筆者も，短い期間ながら，黒島の子どもたちと接する中で，人懐こく接してくることもありながらも，礼儀をわきまえて対応する子どもたちが多かった印象があり，当該話者の話には，ある程度の説得力があるように思われる。その背景として，当該話者は，二つの理由を挙げていた。

一つ目は，島の環境である。高島は，相浦港からフェリーで30分の場所にあり，便数は限られるものの，港との往来は頻繁で，学校も小学生は佐世保市立相浦小学校高島分校に通うものの，中学生は島外に出て通うことになることから，島内の子どもたちと住人との関係が濃密にはなりにくい。一方で黒島は，相浦港からも距離があり，島内である程度，生活が完結することになり，子どもたちも，島に育っている中で，「島の住人のすべての名前は知らないまでも顔は知っている」関係にあると言い，また，住人も，自分の家の子どもではなくとも，島の子どもたちの面倒をみなでみるという伝統的な地域の価値観が今も残っていることを挙げていた。また，二つ目は，カトリック信徒としての幼少期からの体験である。幼少期からミサに通い，地域住民と頻繁に触れ合っていることに加えて，教会神父の存在感，尊厳を実感し，その教えに影響を受けていることも多いという。幼少期からのカトリック信徒としての体験から，自然と社会教育の場を体感し，公共心や自らの立ち居振る舞いを律することを学んでいる者が多いのではないか，ということであった。同時に，学校関係者の立場から，地域住民が，学校教育に対して，非常に協力的で，支援を惜しまない態度で接してくれることがありがたい，とする内容を聞きとることもできた。島に唯一，残されている教育機関を，島内住民が支援していく，ということは当然のことかとも思われるが，地区内，また，地区を越えた中での住民同士の関係が非常に強く，学校に関わる問題などが起こった時も，児童・生徒の父兄はもちろん，その他の住民も，協同して惜しみなく協力してくれるとのことであった。

「島の子どもたちの面倒をみなでみるという伝統的な地域の価値観」に加えて，カトリック信徒のつながりが，子どもたちの社会教育に大きく影響している。同時に，地域住民のつながりが，学校教育を強く支えている。島内での社会教育のあり方は，自然に，島外の者を迎え入れる態度にもつながっているものとも思われる。カトリックへの信仰の紐帯が地域住民を強く結びつけ，それが「島民にオープンな方が多く，その印象が良かった」とする好印象を島外の者に与えるのであり，また，地域コミュニティからの学校教育の支援に大きく作用していると類推することが可能である。

３．黒島にみるソーシャルキャピタルと宗教との関係性，及び教育への作用

黒島において，住民の多くが，カトリックへの信仰を紐帯として，地区全体及び地域全体における強い結びつきを保持し，島外の者に好印象を与えることや社会教育，学校教育支援に影響を与えている状況をみてとる時，「共通の目的に向かって協調行動を導く社会関係上の資源」としてのソーシャルキャピタルと宗教との関わりについて，改めて着目する必要がある。本節では，黒島を通して見出せる，ソーシャルキャピタルと宗教の関係性について論述していくこととする。

ソーシャルキャピタルの蓄積と地域のつながりについて，宗教に依拠するソーシャルキャピタルの醸成，強化に関する研究がなされている。櫻井義秀は，アメリカの教会とソーシャル･サービスをめぐる海外での研究をふまえて，「宗教参加（礼拝出席率）の高さは教会活動へのコミットメントを示しており，そこでボランティアの経験を経ることによって市民活動への参加が高まっている」「教会参加と宗派が，教育，年齢，性，人種，信頼よりも市民活動への参加を説明する」といった事例を提示している（櫻井，2011，p. 40）。また，日本国内の調査では，伝統宗教としての神社をめぐって，金谷信子は，「神社活動の参加が多い人」が「地域・近隣の人々との交流が活発であり，またネットワークのうち自治会・老人会の参加率が高くなること，さらに人々に対する信頼度が高くなる関係があること」などを確認し，「日本の伝統宗教である神道の神社の氏子の間には，信仰心や神社活動を媒介として，ソーシャル・キャピタルを形成する重要な要素である『ネットワーク』『互酬性』や『信頼』が醸成されている可能性が検証された」，「信仰心の強さより，神社活動の参加の方が，ネットワークの構築により貢献している可能性も明らかになった」とする見方を示している（金谷，2013，p.20）。そして，「その広がりは地理的に限定されている可能性も考えられる」と留保しながらも，「伝統宗教に対する信仰心や神社活動が人々の間にネットワークを育み，ネットワークがソーシャル･キャピタルを醸成する可能性は高い」と述べている（金谷，2013，p.21）。同様に，幼少時の寺院・地蔵菩薩・神社の関わりから，一般的信頼や互恵性といったソーシャルキャピタルの要素について調べた研究では，「神社の存在は互恵性に有意にプラスの影響を与える一方，寺院・地蔵菩薩の存在は信頼，互恵性，利他性に有意にプラスの影響を与える」とした調査結果も提示されている（伊藤・窪田ら，2016，p.104）。また，寺沢重法は，国内の伝統宗教の受容者と社会活動の参加をめぐって，「クリスチャン」は「無宗教に比べて社会活動を行う傾向があった」ことなどを示すとともに（寺沢，2012，p.73），「初詣など伝統的宗教行事に行く人ではなく，月に一回以上定期的に宗教施設を訪れる人が社会活動に参加する傾向にある」ことを分析している（寺沢，2012，p.88）。

こうした研究から，ソーシャルキャピタルと宗教との関わりについて考えた時，宗教への「信仰」はもちろんのこと，宗教施設を訪れたり，宗教活動に関わったりする「参加」の要素が，ソーシャルキャピタルの醸成，強化に強く作用していることがうかがえる。ま

た，宗教を通じたネットワークの形成も，ソーシャルキャピタルの醸成に関与している可能性が高い。宗教に関わる「信仰」，「参加」の要素がソーシャルキャピタルの醸成，強化に作用している状況を，黒島のカトリック信徒の現状に照らし合わせてみれば，「『先祖たちは信仰のためにこの島を選び，信仰を守るために奥へ，奥へ，不便なところへと入っていった。』と語り伝え」る（佐世保市教育委員会，2011，p.100），潜伏キリシタンの記憶を保持する中で，その強い「信仰」の様態を類推することができる。また，前節で触れた通り，毎週のミサに加えて，その準備や後片付け，月に 1 回の大掃除や年に 3～4 回の作業も，教会関係の仕事は苦にならない，として積極的に作業に従事するその様子は，宗教に関わる「参加」の様態を示すものとなっている。宗教を通じたネットワークの形成も，地域全体の強い結びつきから見出すことは容易である。厳しい歴史状況を経ながら深められてきた「信仰」と，継承してきた信仰の伝統を保持するために，宗教に関わる行事，用務に積極的に「参加」する状況こそは，正に，黒島において，宗教を通じてソーシャルキャピタルの醸成，強化につながっているものとみなすことができるのではないだろうか。宗教を通じて醸成，強化されたソーシャルキャピタルが，島外の者をあたたかく迎える島民のまなざしにつながっているのであり，なおかつ，それは，子どもたちの社会教育への心配り，学校教育への支援態勢に連関していると言えるのである。

黒島の状況をみてとる時，カトリック信徒が島内人口の多くを占めるものの，仏教徒の存在も，当然ながら等閑視できない。カトリック信徒の動向に対して，仏教徒はどのように応対してきたのであろうか。島内人口の約 8 割のカトリック信徒に対して，歴史的にも協調関係を保持してきた約 2 割の仏教徒は相互の信仰，立場を尊重し，むしろカトリックの動向に歩調をあわせてきたことがうかがえる。例えば，当地では，新しい漁船の就航に際して航海の無事を祈る新船式では，カトリック神父による祈禱が行われる。新船式に際しての当地独特のカトリック神父による祈禱について報告する地域おこし協力隊の一人は，「黒島では当たり前の光景のようですが，初めて見る演歌と大漁旗と神父様という組み合わせにとても驚いた」としている（「日本の離島を IT×人力で元気にする」ニュースサイト・リトレンゴ（離島連合）サイト）。一般に，新しい漁船の就航に際しては，神主による祝詞があげられることが通例だが，カトリックが多数を占める黒島では，カトリック神父による祈禱が行われている。当地独特の当該行事について，カトリックの住民はもちろん，仏教徒の住民も抵抗なく受け入れていることがうかがえる。当該行事にみてとることができるように，島内のカトリック信徒も仏教徒も互いの信仰，立場を尊重するとともに，双方の考え方も相互に影響を及ぼしていることを想定することも可能となる。カトリック信徒の住民によるソーシャルキャピタルの醸成，強化は，仏教徒の住民にも影響を与えているものと思われる。

カトリック信徒の宗教への「信仰」と「参加」は，ソーシャルキャピタルの醸成，強化にもつながっていくのであり，それはまた，地域の教育に作用していくこととなる。住民

の８割を占めて，その他の仏教徒にも影響を与えていると思われるカトリック信徒のあり方こそは，正に黒島の教育を支えていると言えるのである。

Ⅳ．調査対象校での特徴的な教育活動とその考察

調査対象校である，黒島小中学校の特徴的な教育活動には，開校初年の 2018 年度から実施されている「ふるさと黒島学」の取り組みがある。教育課程においては，総合的な学習の時間と特別活動の時間が充てられている。本章では，「ふるさと黒島学」の取り組みを取り上げて，当地で醸成，強化されているソーシャルキャピタルが支えるへき地教育の取組みについて論ずることとする。

「ふるさと黒島学」は，その中心となる眼目として「郷土黒島と自身の未来を切り開く児童生徒の育成」を挙げている（「令和元年度　ふるさと黒島学全体計画」。以下，当該教育活動の内容は，当資料による)。「ふるさと黒島学」の重点目標は，学校の教育目標「９年間を通して育てる ふるさとを愛し，未来を切り開く黒島っ子の育成」にも直接つながるものであり，当該校の教育活動として根幹に据えられたものとしても捉えることができる。また，「ふるさと黒島学」の重点目標の細目，及び当該実践における目指すべき児童生徒像は，第４表の通りである。

第４表　「ふるさと黒島学」重点目標の細目，及び当該実践における目指すべき児童生徒像

項目	内　容
重点目標の細目	・自ら課題を見つけ，自ら学び，自ら考え，主体的に判断し，よりよく問題を解決する資質や能力を育てる。 ・学び方やものの考え方を身につけ，問題の解決や探究活動に主体的，創造的，協同的に取り組む態度を育て，自らが社会を生き抜くための力をはぐくむことができるようにする。 ・１年～９年までの「絆」を重んじ，郷土黒島を愛するとともに自身の未来を切り開く姿勢を育てる。
目指すべき児童生徒像	・黒島の文化や歴史，環境と主体的に関わり，体験や活動を通して自分たちの地域を知り，地域を愛し進んでよくしようとする子ども ・現在の自分を見つめ，将来の夢や職業について自ら考え行動しようとする子ども ・自分が経験したことや感じたことの中から課題を見つけ，目標を立て，　進んで探求しようとする子ども ・自分の思いや考えを自分なりの言葉で表現し，友だち・家庭・地域の人々への情報発信などをして働きかけることができる子ども

（「黒島小中学校　令和元年度　ふるさと黒島学全体計画」をもとに筆者作成　下線部は筆者による。）

「ふるさと黒島学」において，最も力点の置かれているものは，「地域・文化学習」の項目であり，「目指すべき児童生徒像」にも「黒島の文化や歴史，環境と主体的に関わり，体験や活動を通して自分たちの地域を知り，地域を愛し進んでよくしようとする子ども」とする項目が最初に挙げられているほか，例えば，実施時間でも，複式学級で交互に実施される内容で，5・6 学年では，総合的な学習の時間 70 時間，特別活動 10 時間を充当した 80 時間のうち，「地域・文化学習」には，奇数年度で 36 時間，偶数年度で 28 時間が充てられている。その他，「学校行事関連」で奇数年度は宿泊体験学習 10 時間など 18 時間，偶数年度は修学旅行 10 時間，長崎平和学習 10 時間など 26 時間が充てられていて，それら学校行事関連の時間を除けば，突出して多くの時間が割かれていることがわかる。「地域・文化学習」の学年配当，主な内容などは，第 5 表の通りである。

第 5 表　「ふるさと黒島学」における「地域・文化学習」の配当学年，主な内容

テーマ	配当学年	実施時数	主な内容
お魚祭り	全学年	4	７月第１週土曜日に実施。以下の内容を実施。 ・魚釣り体験・魚さばき体験・マグロ解体見学・稚魚の放流
漁業体験	３ ～ ６ 年 (隔年)	6	漁師に船を出してもらい，漁船に乗り込んで，漁業の仕事を見学，学ぶ
かんころ餅つくり	１～６年 (隔年，交互に実施)	１０	地元の名産品である，かんころ餅，黒島豆腐つくりに取り組む
黒島豆腐つくり			
シーカヤック体験	３～９年	6	学校で購入しているシーカヤックを用いて，インストラクターを招いて，近隣の海で，シーカヤック体験を実施する
観光パンフレット作成	５・６年 (隔年)	１０	観光案内にも用いることのできる島内の観光パンフレットを作成する
黒島フォトコンテスト	７年	4	島内の写真を撮影し，校内でフォトコンテストを実施する
黒島検定	８，９年	5	地元有識者から地域の歴史・文化について４時間の講義を受け，黒島子ども検定を受験する
※　黒島の CM を作ろう	９年	２５	「情報」枠で設定。黒島を紹介する CM 動画を作成し，地元放送局が主催する「ふるさと CM 大賞」にエントリーする。

（黒島小中学校「『ふるさと黒島学』年間カリキュラム」をもとに筆者作成
※印は「情報」枠設定の地域学習関連テーマ）

「ふるさと黒島学」に関わる教員からの聞き取りによれば，当該実践のほとんどは，以前から取り組んでいたもので，それを改めて一貫したプログラムに編制し直したものである。これまでのように学年裁量では調整できない不自由さはあり，また，多くの内容が盛り込まれていて，教員の負担感も大きいが，学年ごとに少ない教員で担当することになることから，取り組みが決まっている方がやりやすいという見方もある，とのことであった。加えて，お魚まつりやシーカヤック体験などは，従前は行事参加の形で実施していて，当該実践を始めるにあたって，授業内に組み込むことになった，とのことであった。従来から実施しているものに加えて，黒島フォトコンテストや，「情報」枠ではあるが，黒島の CM を作る取り組みなど，学年担当のアイディアで，新たに加えたものもあるという。また，改めて当該実践のポイントは，学校教育目標に沿った部分でもある，地域文化の学びにあると言い，外のことを知る，ということと同時に，足元の黒島のことをしっかりと学んでいくことで島への愛着を高めてほしい，とのことであった。

その際，当該実践における地域住民の関与は欠かせない。たとえば，お魚まつりは，地元漁協と校区の青少年健全育成連絡協議会との共催で実施され，そこに生徒は授業の一環として参加することになる。また，黒島検定は，それまでは公民館主催で行っていたものを，有識者として公民館館長を校内に講師として招いて 5 時間配当で実施するものであり，いわば，社会教育のとりくみを転換して校内の地域教育に取り込んだ実践と見ることもできる。当該講義では，単なる黒島の歴史文化に関わる知識を伝えることのみならず，生徒の名字から，先祖の黒島移住前の地域を示しつつ，移住の経過の話などに及ぶこともあると言い，教員の担当では準備のおぼつかないような，地域に関わる歴史講義がなされることも多いという。地域理解に関わる取り組みに際して，企画自体は学校が提示することになるが，実施に際して，地域住民が実行委員会的な組織を立ち上げて対応してくれているとのことであり，先述した黒島検定で講師を務める公民館館長も，聞き取りでは，学校からの要請には率先して賛同し，参加する意向だったと話していた。地域文化の理解のために多彩なプログラムを用意する当該実践は，正に，地域住民の支援なしには運営できないものであり，その積極的な関与が，当該校における地域の学びを支えているということができる。「ふるさと黒島学」の実践は，海に囲まれた豊かな自然環境においてこそ実現が可能となる取り組みであり，また，それを支える地域住民，地域共同体の支援があって初めて実現できるものとなっている。「ふるさと黒島学」の実践は，正に，当地で醸成，強化されているソーシャルキャピタルが支える教育実践であると捉えることができる。

また，当該実践担当教員は，学校教育，及び児童・生徒に対する地域住民の対応も含めた，黒島の印象について，次のように語っている。「（学校に関わる）健全育成会とか育友会もそうだし，地域の旅館なんかでもですね，商店とかもいろんな人がやっぱり声を（子どもたちに）しっかりかけてくれるんですね。子どもたちにとってもすごい場所だなあって思いますね」。教員経験は 6 年目で，3 年前に初めて離島での勤務となった黒島の教員生

活のこれまでの経緯も振り返りながら，地域住民が，正に一体となって子どもたちに関わっている当地の様子は，当該教員をして思わず，「すごい場所だなあ」と言わしめる教育態勢が取られていることがうかがえる。関連して，聞き取りをした7，8年生の生徒が，「（小さいころから参加している）ミサがあるので，地区の人と交流する機会は多い」と話していたことも印象深い。また，先述した公民館館長もカトリック信徒で，ミサなどを通じて，子どもたちの顔は見知っている者がほとんである，とも話していた[9]。黒島小中学校の教育実践に関する地域住民の深い関わりは，へき地としての小さな共同体の中で，地元の子どもたちを大切に育てていこう，とする意識があることに加えて，カトリック信徒としての関係性が，地域住民と子どもたちをつなぎ留めていることも重要な素因としてみて取ることもできるのではないだろうか。

加えて，地域に特化した特徴的な教育実践は，学びを深める子どもたちのみならず，地域全体に影響を与えている可能性もあり，またそれらをつなぐ場としての学校の機能を見出すこともできる。第 1 章で触れた内閣府の調査では，「地域に愛着を持つ人が増えること」は，「ソーシャル・キャピタル醸成の成果であり，これがさらなるソーシャル・キャピタルの広がりにフィード バックされていくことになる」とする分析を示している（内閣府，2003，p.84）。また，ソーシャルキャピタルと教育の関わりについて，「ソーシャル・キャピタルは，教育に有益な効果をもたらすことが期待されている」とし，その両者の関係性について，「一方的なものではなく，ソーシャル・キャピタルと人的資本（ヒューマン・キャピタル）は，相互に強化しあう関係にある」とする。そして，「教育・訓練の多くは様々なタイプのコミュニティ・ベースのネットワークによって支援することにより，効果を高めることができる一方，人的資本への投資である教育は，ソーシャル・キャピタルの形成にも役立つという関係である」と結論づけている（内閣府，2003，p.102）。また，露口健司は，ソーシャルキャピタル醸成に際して，「地域社会の中に『触媒機能』と『結合機能』を主体的に引き受ける組織が必要」であるとし，「これらの機能の遂行が期待されるのは学校であろう」と述べている（露口，2011，p.189）。

「相互に強化しあう関係」（内閣府，2003，p.102）として，ソーシャルキャピタル醸成と，教育を通した地域人材形成との関わりを見出す時，「ふるさと黒島学」は，地域住民の積極的関与を通して，子どもたちの地域の学びを深化させると同時に，「島の子どもたちの面倒をみなでみるという伝統的な地域の価値観」を，改めて地域住民に呼び覚ますものとなっているにちがいない。地域に特化した学びを通して，子どもたちと地域住民双方が，ソーシャルキャピタルを互いに強化していく関係性につながっていると位置づけることができるのであり，学校は，正に，地域社会におけるソーシャルキャピタル醸成の「触媒機能」「結合機能」として機能していると捉えることができる。

「ふるさと黒島学」の取り組みは，へき地としての小さな共同体の意識とカトリック信徒としての関係性から醸成，強化されているソーシャルキャピタルが支えているのであり，

同時に，「触媒機能」を有する学校の，地域に特化した学びを通して，子どもたちと地域住民双方が，ソーシャルキャピタルを互いに強化していく関係性につながっていると言えるのである。

Ⅴ．おわりに

本研究の目的は，佐世保市黒島を事例に，宗教を通じたソーシャルキャピタルの醸成，強化と，ソーシャルキャピタルとも関連したへき地の環境に着目し，宗教を基軸とした地域のつながりを明らかにするとともに，それが支えるへき地教育の取組みについて明示することであった。上記の目的を達成するために，第３章では，黒島の開発と潜伏キリシタンの歴史について概括するとともに，黒島の日常におけるキリスト教との関わりについて取り上げ，黒島を通して見出せる，ソーシャルキャピタルと宗教の関係性，及び教育への作用について論じた。黒島の事例を通して，宗教を通じて醸成，強化されたソーシャルキャピタルは，子どもたちの社会教育に関与し，学校教育への支援態勢に連関していることを明らかにした。第４章では，黒島小中学校における「ふるさと黒島学」の取り組みを取り上げて，へき地教育の取組みについて分析した。当該実践は，地域住民，地域共同体の支援があって初めて実現できるものとなっており，地域住民，地域共同体の積極的な関与が，当該校における地域の学びを支えているということができる。黒島小中学校の教育実践に関する地域住民の深い関わりは，へき地としての小さな共同体の中で，地元の子どもたちを大切に育てていこう，とする意識があることに加えて，カトリック信徒としての関係性が，地域住民と子どもたちをつなぎ留めていることも重要な素因であり，カトリックへの信仰を通して醸成，強化されているソーシャルキャピタルが，黒島小中学校の特徴的な教育実践を支えていることを明らかにした。同時に，地域に特化した学びを通して，子どもたちと住民双方が，ソーシャルキャピタルを互いに強化していく関係性につながっていることを見出し，地域社会におけるソーシャルキャピタル醸成の「触媒機能」「結合機能」として学校が機能していることも明らかにした。

黒島の教育を支える地域基盤は，へき地としての離島ならではの，歴史的な経過を経ながら維持され続けている伝統的な共同体，及び，住民の８割に及ぶカトリックに対する信仰とそれに起因する社会参加に由来する，確固たるソーシャルキャピタルにあると捉えることができる。宗教を通じたソーシャルキャピタルの醸成，強化と，ソーシャルキャピタルとも関連したへき地の環境が，宗教を基軸とした地域のつながりを生み出し，それが特徴的なへき地教育の取組みにつながっていると結論付けることができるのである。

宗教を基軸とした地域のつながりを保持し，特徴的なへき地教育に取組む黒島は，今後，さらに注目すべき地域として位置づけていくことができる。しかしながら，島内人口の急激な減少は，地域基盤そのものを喪失しかねない事態となっている。黒島小中学校設立に際して討議された黒島小中学校検討委員会では，在籍児童生徒を増やすことを目的に，島

外の子どもたちを招き入れる，いわゆる「島留学」を導入することが真剣に検討された。結果的に「島留学」の実施は見送られたが，黒島小中学校検討委員会の会議では，次のような発言もあった。

> 大切なのは子どもを増やすだけでなく，同時に島の外からの移住者を増やすことが必要。 島に帰ってくれる島の人を増やすことが必要。島の根本的な問題を解決しないといけない。
> （2017 年 7 月 12 日付「第８回黒島小中学校検討委員会議事録」より一部抜粋）

「島の根本的な問題」として，島内人口の確保が急務となっており，その対処がなされない中では，黒島の将来像も描き難いものとなっている現実もある。

一方で，黒島のアイデンティティを強化する出来事も起こっている。先述した通り，2018 年 7 月に世界文化遺産に登録された「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」の 12 の構成資産の一つに「黒島の集落」が選定されたことである。このことについて，黒島天主堂の大山繁司祭は，雑誌の web 記事の取材に対して，次のように答えている。

> 集落，として世界遺産に登録されたということは，この小さな島で人々が守ってきた信仰のかたち，営みや暮らしそのものが，価値あるものとして認められたということです。それはただ，黒島天主堂の建築物の価値が認められた，ということではなく，もっと精神的なもの，黒島の人々の心，そこから生まれた文化が評価されたということ。そのことを，島の人々はうれしく思っているはずです。ですから島を訪れる皆さんには，ぜひ，その心を感じ取ってほしいと思います。
> （マガジンハウス Web マガジン「Local Network Magazine「colocal コロカル」」2018 年 8 月 24 日付「祈りの島 佐世保・黒島。ある日，世界遺産になった小さな島の教会〈黒島天主堂〉をめぐる物語」参照，下線部は筆者による）

当該世界遺産の選定について，建築物としての黒島天主堂に，一般の注目は注がれる傾向にあるが，実際の構成資産は，信仰を保ち続けた「黒島の集落」にあり，司祭の指摘する通り，「人々が守ってきた信仰のかたち，営みや暮らしそのものが，価値あるものとして認められた」ことによるものである。へき地としての伝統的な共同体，住民の多くが帰依するカトリックの信仰に加えて，カトリック信徒としての活動自体が称揚された今般の世界遺産選定は，さらに当該地域住民のアイデンティティを高め，また，学校を積極的に支援する教育活動につながっていくものと思われる。同時に，子どもたちも，それをもとにして地元への理解を深め，愛着を高めていくものとなるにちがいない。世界遺産選定に伴う観光振興と教育の相乗効果から，住民の地域アイデンティティはさらに強められるもの

と期待できるのであり，その結果として，ソーシャルキャピタルもまた強化されていくことことなるであろう。

急激な人口減少は，黒島に代表されるへき地の存在そのものを危うくさせている。地域のソーシャルキャピタルを発現し，強化する場所としての学校の存在感，及び特色あるへき地教育の取組みに注目し，地域に照らされた教育の灯をとだえさせない取り組みが，改めて求められていると言えるのである。

謝辞

現地調査に際して，佐世保市立黒島小中学校・惣田正宏校長先生をはじめとした教職員の皆様，佐世保市黒島地区公民館の皆様，黒島史跡保存会・鶴崎時雄様，民宿つるさきの皆様ほか，黒島地区の多くの皆様には大変お世話になりました。黒島小中学校の児童生徒の皆さんと交流できたことも楽しい時間となりました。皆様からいただきましたご助力，ご支援に心より御礼申し上げます。

注

1）2010 年 1 月の NHK のテレビ番組の造語であり，家族や地域，社会とのつながりが薄れた，現代日本の重大な社会問題として意味づけられた。

2）2019 年度の学年ごとの児童生徒数は，以下の通り。1 学年 2 名，2 学年 1 名，3 学年 4 名，4 学年 1 名，5 学年在籍なし，6 学年：1 名，7 学年（後期課程。中学校 1 学年の意。以下の学年表記は後期課程の学年）3 名，8 学年 3 名，9 学年 1 名。

3）「潜伏キリシタン」と「隠れキリシタン」をめぐっては，解釈が分かれているものもあり，『国史大辞典』によれば，「潜伏キリシタン」は，「江戸幕府がキリスト教禁止令を出した慶長十八年（一六一三）から信仰を表明して復活した慶応元年（一八六五）までの約二百五十年間にわたり禁圧・迫害のため潜伏を余儀なくされたキリスト教信徒」を指し，それに対して，「隠れキリシタン」は，「潜伏時代以来の偽装を続け混成宗教化した信仰習俗を固持している者」として，定義されている。一方，『日本大百科全書』は，禁教下において，「表面は仏教徒を装い，内心では祖先代々受け継いだキリシタン信仰を保持した人々，またキリスト教から離れた一種の混成宗教を信奉する人々」について，「これらの人々の信仰におけるキリスト教的要素は，地域的に，また年代的にもかなり異なっているから，総称するのは困難であるが，通常「隠れキリシタン」とか「潜伏キリシタン」とよんでいる」として表記している。本稿では，特に，黒島の信徒のほとんどが，禁教令解禁後にカトリック信徒に「復帰」したことから，当該信者を「潜伏キリシタン」として表記することとする。

4）黒島の歴史に関連する記述について，引用分は適宜，本文中に明示するが，基本的に，以下の文献，サイトをもとに論述した。長崎巡礼協議会『黒島とマルマン神父～そして田平へと移住した信徒たち～』2010 年／佐世保市教育委員会『佐世保市文化財調査報告　第 5 集　佐世保市黒島の文化的景観―保存調査報告書―』2011 年／世界文化遺産「長崎と天草地方の潜伏とキリシタン関連遺産」サイト「黒島の集落」。

5）プチジャン神父は1685年5月29日付書簡で「私たちと同じ心を持っているといわれる人口5～600人の島」から来たという信者のことを報告していて，それに該当する島が黒島であったと想定されている（佐世保市教育委員会，2011，p.46）。
6）例として，男児のドミニコ，フランシスコ，ガブリエルなど，女子にアドニス，アグネス，キャサリンなどを挙げている。
7）ポルトガル語の水曜日はquarta feira（クアルタ フェイラ），木曜日はquinta feira（キンタ フェイラ），金曜日はsexta feira（セスタ フェイラ）。
8）「出不足金」について，『朝日新聞』では，2000年代に入って，10件が取り上げられている。例えば，2006年5月4日付朝刊では，投書欄で「『（町内清掃活動に）当日欠席者は，出不足金2千円徴収』とあった」ことに驚いた，とし，「もっと民主的な町内会活動になってほしいと考えています」として，町内での作業の強制に違和感を覚える，とした趣旨の内容を掲載している。協同作業に欠席者が増えたことが「出不足金」徴収の背景と思われるが，協同作業を強制と捉えて，「民主的」でないとする声が多くなっていることがうかがえる。
9）2019年度の黒島小中学校における地区別在籍児童生徒数は，以下の通りである。田代4名，名切6名，古里2名，東堂平4名。各児童生徒の信仰する宗教について確認することはできなかったが，仏教徒の古里地区2名以外のほとんどの児童生徒がカトリック信徒であることは，在籍地区からも類推できる。

文献

伊藤高弘・窪田康平・大竹文雄(2016)：寺院・地蔵・神社の社会・経済的帰結：プログレスレポート，行動経済学，**9**，pp.102-105。

稲葉陽二(2008)：［解説］ソーシャルキャピタルの苗床としてのコミュニティ，稲葉陽二編『ソーシャルキャピタルの潜在力』，日本評論社，2008年。

稲葉陽二(2011)：『ソーシャル・キャピタル入門』，中央公論新社，198p。

大谷栄一(2012)：宗教は地域社会をつくることができるのか？，大谷栄一・藤本頼生編著『叢書　宗教とソーシャルキャピタル２　地域社会をつくる宗教』，明石書店，pp.19-42。

金谷信子(2013)：日本の伝統宗教とソーシャル・キャピタル: 神社活動を事例に，宗教と社会貢献，**3**(2)，pp.1-25。

櫻井義秀(2011)：ソーシャル・キャピタル論の射程と宗教，宗教と社会貢献，**1**(1)，pp.27-51。

佐世保市教育委員会(2011)：『佐世保市文化財調査報告　第5集　佐世保市黒島の文化的景観―保存調査報告書―』。

志賀重昂(1911)：『世界山水図説』，冨山房，230p。

玉井康之(2002)：現代におけるへき地教育の特性とパラダイム転換の可能性，へき地教育研究，**57**，pp.1-5。

露口健司(2011)：教育，稲葉陽二・大守隆ら編『ソーシャルキャピタルのフロンティア』，

ミネルヴァ書房，pp.173-196。
寺沢重法(2012)：現代日本における伝統仏教と社会活動への参加ー全国調査データの計量分析，櫻井義秀・濱田陽編著『叢書　宗教とソーシャルキャピタル１　アジアの宗教とソーシャル』，明石書店，pp.60-92。
長崎巡礼協議会(2010)：『黒島とマルマン神父～そして田平へと移住した信徒たち～』，59p。
三木剛志(2015)：わが国における離島振興政策の概要とその展開，日本地理学会発表要旨集，2015s(0), 100088。
内閣府(2003)：ソーシャル・キャピタル：豊かな人間関係と市民活動の好循環を求めて，https://www.npo-homepage.go.jp/toukei/2009izen-chousa/2009izen-sonota/2002social-capital　（最終閲覧日：2020 年 7 月 31 日）。
黒島小中学校 H.P.「委員会議事録」http://www.city.sasebo.ed.jp/es-kuroshima/asp/kiji/pub/default.asp?c_id=9583（最終閲覧日：2020 年 7 月 31 日）。
佐世保市統計ポータルサイト「01_人口及び世帯数」https://www.city.sasebo.lg.jp/kikaku/seisak/toukei-jinkou.html（最終閲覧日：2020 年 7 月 31 日）。
佐世保市 平成 25 年 12 月定例会文教厚生委員会 12 月 12 日－02 号 https://ssp.kaigiroku.net/tenant/sasebo/SpMinuteView.html?council_id=722&schedule_id=3&minute_id=24&is_search=true　（最終閲覧日：2020 年 7 月 31 日）。
世界文化遺産「長崎と天草地方の潜伏とキリシタン関連遺産」サイト「黒島の集落」http://kirishitan.jp/components/com007　（最終閲覧日：2020 年 7 月 31 日）。
全国へき地教育連盟サイト http://www.zenhekiren.net/link/kyushu.html#row_42（最終閲覧日：2020 年 7 月 31 日）。
「日本の離島を IT×人力で元気にする」ニュースサイト・リトレンゴ（離島連合）サイト https://www.ritorengo.com/kuroshima-chiikiokoshikyouryokutai/（最終閲覧日：2020 年 7 月 31 日）
マガジンハウス Web マガジン「Local Network Magazine『colocal コロカル』」2018.8.24 付「祈りの島 佐世保・黒島。ある日，世界遺産になった小さな島の教会〈黒島天主堂〉をめぐる物語」https://colocal.jp/topics/art-design-architecture/architecture-note/20180824_116090.html（最終閲覧日：2020 年 7 月 31 日）。